

後藤 康夫

少年時代の箕面の印象としては、遠足でドングリを集めたこと、肉屋で猪の肉を売っていたこと、滝近くで猿の群れに囲まれ怖かったことなど、箕面に住んで 34 年経つ。

「みのお市民まちなみ会議」の活動を知ったのは、桜ヶ丘図書館の二階で、大正住宅博覧会に関するパネル展です。会員の方から熱意ある説明を受けて、興味を持った。

これを切っ掛けに入会し、市内を努めて歩き、地元の歴史を学び、指定樹木の古木や巨木に触れ、景観について考えるようになりましたが、個々の力を如何に結集するか知恵を絞っています。

箕面について長く住んだのは隣の豊中です。近年急速に住宅が過密になり、空間の余裕が少なくなりました。箕面はちょっと歩くと山並みが見えて、晴れやかな気分になります。散歩の途中で見つけた、立葵のピンクや赤い花は、私の好きな花で、花の季節には、一層散歩が楽しくなります。この良き環境を維持し、更に向上させたいものです。

最近注目していることですが、人々の暮らしと安全、景観の問題です。自宅（桜井 3）近くの国道 171号線の歩道の幅が狭いことです。昨年舗装工事と歩道の Up & Downが改良されましたが、中央線や市役所前の歩道と較べて幅が狭く、歩行者・自転車とも通行に危険を強く感じています。車道は通行量が市内で最も多く、何とか拡幅できないか、早急な改良が望まれます。景観を保全することの前提に、人々の暮らしの安全を確立することが、大切だと考えます。

また国道 171号南の桜井 3から牧落 5にかけてある貴重な田園が、将来どうなっていくか気になるところです。



## 桜井住宅と池田室町住宅

箕面有馬電気軌道（阪急）が明治 43 年(1910)に開業して、今年には 100周年に当たります。この開業に合わせて、乗客の確保をねらって、住宅販売にも乗り出した。その第 1 号が池田市の室町住宅であり、翌年に桜井でも住宅販売が行われた。いずれも当時としては画期的な庶民層を対象に、我が国で最初の月賦販売を実施した。

昨年、今年と桜井住宅、室町住宅をタウンウォッチして、比較する機会があった。僅か 1 年程の差であるが、約 100 年を経過すると二つの住宅地に大きな差が生じていた。これを比較してみた。

総面積は、室町が 2 万 7 千坪（約 89,100 m<sup>2</sup>）に対し、桜井は 5 万 5 千坪（約 181,500 m<sup>2</sup>）で、室町は 1 区画が 100 坪（約 330 m<sup>2</sup>）ほどで、2,500 円から 1,800 円で販売され、桜井では 1,200 円以内に価格を抑えて販売された。

室町は阪急線に沿って 2 本の通りと、直交して 10 本の小道で区画されていた。一方桜井でも、阪急線に沿って 6 本の通りと、直交して数本の小道で区画されている。室町には中心部近くの、旧くからの呉服神社の杜が、街に緑の潤いを与えていた。桜井では周囲が田園地帯だったので、中央部の道幅を広くして、桜並木が作られていた。



池田室町に残る住宅



桜井の住宅

室町を歩くと、100 年も経過しているのが当然だが、桜井に比べて街の雰囲気が異なる。分譲当時の面影を残す住宅は、数える程しか残ってなく、敷地も分割されて建て変わった家々は、最近の新しい建築様式が多く、一般の市街地住宅と変わらなかった。

私達に馴染みの桜井も、個々には建て替えが行われ、当時の建物は殆ど見られないが、街の雰囲気は室町より歴史のある住宅街の趣を感じる。しかし、昨近では敷地が分割され、

新しい様式の住宅が建ちつゝある。

池田室町が新しい街の様相を呈しているのは、北摂の中心地として、阪急の開業を期に

市の中心部が、比較的早い時期に、栄本町から池田駅周辺に移った為と考える。一方、桜井は同じく駅に近いが、支線で中心部からも離れており、他に新しい住宅地が広がり、桜井が急速に変化すべき要素が乏しかったのだろう。

両町には分譲当初、住民のコミュニティセンターとして、室町倶楽部、桜井倶楽部が作られ、玉突き、囲碁、将棋など娯楽の場が提供され、自治組織を作って運営されていた。



室町会館

室町倶楽部は建て替えられ、室町会館として現在もコミュニティセンターとして活用され、室町住宅のシンボルとして、街の人々に大切にされている。一方桜井倶楽部の跡地は銀行となっている。

住宅街の道路は、当時としては道幅も小道でも最低 2間 (3.6m) で、閑静な住宅街の大きな要素だった。現代は車社会となり、各戸が車を所有すると、室町も桜井も車の通行には道幅が狭い。その為一方交通にしたりしている。室町と桜井の大きな違いは、住宅地の交差点である。

狭い道路の交差点では、安全確認で一旦停止しても、角地に建物が在ると、車体は交差点に入ってしまう、出会い頭の衝突の危険がある。

箕面市では住民の協力を得て、敷地の角を一部斜めに区切る、隅切りを行い交差点の安全確認が容易に出来る様にしている。室町では、この処置がされていないので、運転には非常に気を使う。

分譲後 100年を経ると、街も異なった様相を呈し、とても、同じ様に造られた街とは、考えられな

い。この違いは何故生じたのだろうか、場所周辺の環境、状況の変化、そこに住む人々の考え方、行政の姿勢など、いろいろの要素に因ると思うが、街並みに関心をもつ、私達には興味深いウォッチングでした。



桜井住宅の隅切り

(大町 凱彦)

“街中のゴミを拾う” わたしたちの住む街を美しく

## “箕面中一老人クラブ”

会員 130名 代表者 岡室 喜人

箕面のシンボル、箕面滝まで毎朝健康ウォーキングをやっていた。10年ほど前から、折角歩くのだから、途中のゴミを拾いながら歩こうとなり仲間と始めた。(代表者)

この活動を、自分たちの住む街でも実行しようと呼びかけ、箕面中一老人クラブの有志が、毎週月曜日の朝に、市役所前から阪急踏み切り迄、中央線の左右の清掃活動をしている。当初は、ゴミの有料化前で、市民の意識も低かったのか、ポイ捨てが多く、ビニール袋に空き缶やペットボトル、食べ残しなどを入れて、捨てられていた。最近では意識の高まりを反映したのか、ビニール袋のポイ捨ては少なくなった。しかし、捨てる人の気持ちが悪質化したのか、街路の植え込みに隠すように捨てるケースが見られ残念です。殆ど変わらないのは、タバコの吸殻のポイ捨てで、紙の白さが目立ち、通行人が踏み付けて拾い難くなっている。タバコを吸う人のマナーの向上を願っています。

特に困っていることは、犬の糞の不始末です。飼い犬を散歩させている愛犬家の多くは、ビニール袋などを携行して、始末して下さいますが、一部の不心得の方が、全く始末をせずに放置されます。会員は火鉢で、ゴミを拾っていますが、犬の糞はビニール袋などを利用して、手で取っています。人に踏まれて、路面に付着したものを取るのは、特に不快なものです。愛犬家の方々、糞の始末だけは、確実にして頂きたいと願っております。

これから秋が深まると、中央線に沿って植わっている、銀杏に黄色の実が成り、路上に落下します。これを踏みつけると、強烈な匂いを発するので、人々に嫌われます。会員がせっせと拾って除去しています。その後は落葉の季節で、黄色に色付いた銀杏、赤く染まった桜の葉が、風と共に舞い落ちます。沿道の家々の方もおおわらわですが、清掃が追い付かない状況で、市の作業車も動員されます。

春の桜、夏の緑、秋の黄葉など、中央線の景観は美しく、市民の誇りです。しかし、人知れず、ゴミを拾って街の清掃を続けている方々の努力で、支えられています。



## 第二名神と止々呂美の景観

第二名神のインターチェンジが、止々呂美に計画されている。高速道路については、着工の是非が論ぜられていますが、止々呂美 IC 取付け道路の計画変更など、近く都市計画審議会に諮問される予定です。

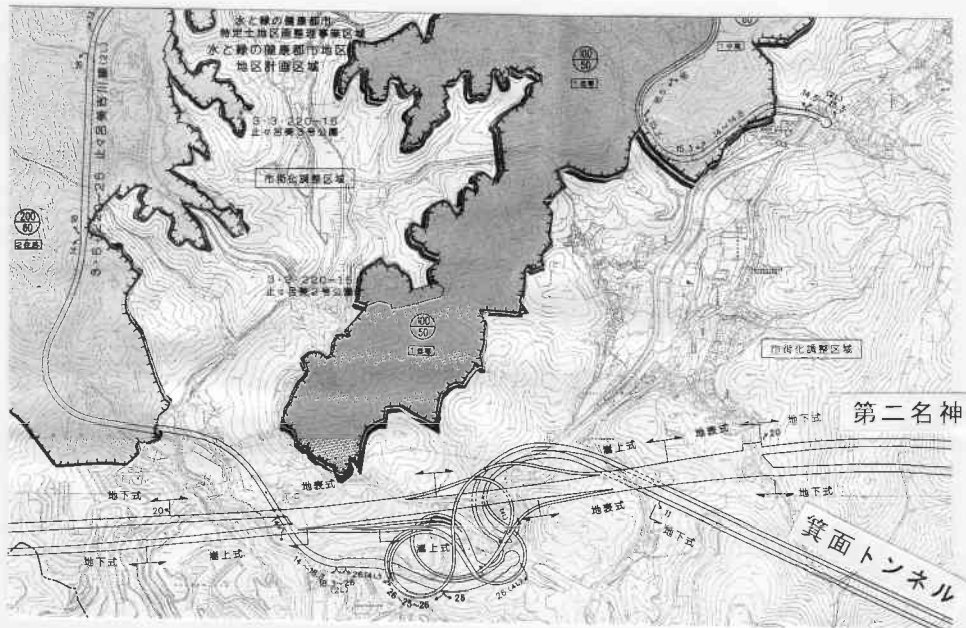
実際に着工されても、相当の工事期間を要しますが、開通すれば中国道の宝塚トンネル付近の慢性的渋滞が解消される期待があります。

止々呂美 IC を通じて、多くの車や人が訪れることが予想され、対応する店などが進出する事でしょう。それ自体は、

止々呂美地区の活性化にも繋がり、喜ばしいことです。しかし、止々呂美は、箕面に残る農村風景の貴重な景観の地ですが、他の地域に比して高齢化と人口減が進んでおり、箕面森町の街づくり開発も、此の現状を打開する一つの方法です。

とは云え、日夜猪や猿、鹿による農作物、山林資源が獣被害を受け、また木材、菊炭などの不振で山林も荒れがちです。止々呂美は景観が素晴らしい、是非守らなければならないと人々は云うが、誰がその行動をするのだ！ と悲痛な声を挙げながら、懸命に山や田畑を手入れして守っているのは、地元の人々です。止々呂美の景観を保全する取り組みを箕面市にも期待したいところです。

第二名神の開通など、何時のことやらと思っている間に、手遅れにならないように皆んなで関心を持ちたいものです。



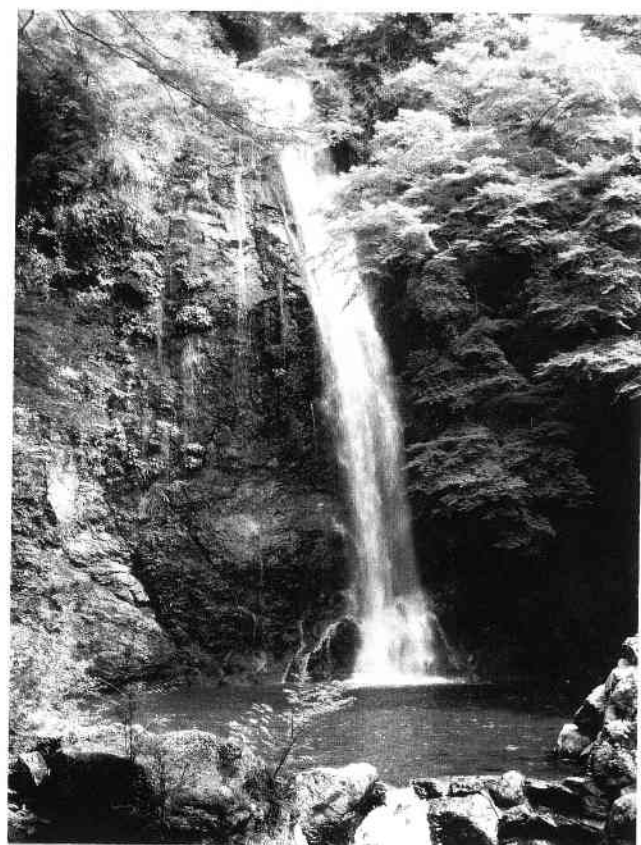
# 私の滝道歩き

—— 健康の維持と確認のために ——

## □ 楽しい滝道歩き

もう何年続いていることでしょうか？ 私は1年を通じて週に3～4回、自宅から箕面の滝まで川沿いの道を歩いています。私の住まいは箕面駅から滝道をほんの少し上がったところですから、滝まではほぼ2.6km 往復で5.2 km、1時間と少しの散策です。これは私にとって健康維持のための健康法でもありその日の健康状態の確認でもあるのです。

手のかじかむ寒い冬の日、汗だくになる暑い夏の日、何となく気のすすまない日など、1年のうちには色々ありますが、そんな時にはあまり無理をしないようにしています。けれどこの滝道の往復1時間あまりは、オゾンいっぱい空気を吸って、せせらぎの響きや小鳥の声を聞きながら、四季それぞれに、輝く新緑、燃えるような紅葉、白銀の雪景色など溪谷の美しさを眺めて歩けるだけでなく、足下にかわいい草花や灌木の花を見ることが



もできます。カメラを持って出かけることもよくあります。また、近所の方とか学校時代の友人やグループ仲間に出会って立ち話をすることもあれば、お互い名前は知らないけれどこの滝道で顔見知りになった「歩き仲間」と挨拶も交わします。この1時間あまりは、私にはとても楽しいひと時なのです。気分のリフレッシュにもなっています。

## □ 私の「歩き」の原点

歩くことが私の生活の一部になったのはいつの頃からだろうか？と考えてみました。私の「歩き」の原点は中学生の頃だったように思います。

私が箕面小学校を卒業して池田中学校（今の池田高校）へ入学したのは1941年（昭和16年）、この年の12月8日に日本は真珠湾を攻撃して太平洋戦争を始めています。私の家は牧落の八幡宮の少し北、牧落の駅から歩いて5分ほどのところでした。戦争の時代ですから、牧落から通う生徒に認められる通学方法は徒歩通学だけで、電車はもちろん自転車も認められません。電車で通学できる箕面（当時の平尾）の友達がうらやましかったものです。けれど今になって振り返ってみると、中学生の時代に牧落から学校まで、季節により日によりさまざまなルートを歩いて通学したことで、歩くことが身につき、歩く楽しさを何となく覚えたのかもしれない。